

続・フードコートで特訓中!

今回と同じ見出しを前号で使用した。相変わらず“特訓”を続けているわけだが、その第2弾を。

フードコートという場所は、大勢の客のにぎわい、ざわめき、ときに身体的な衝突もあって、忍耐力や鈍感力の養成には打ってつけといえる。閉口するのは、食事中に背後からぶつかることだ。

- ラーメンを食べていたら後頭部にお盆が当たり、レンゲのスープが鼻に。
- たこ焼きをフーフーしているときにゴツンとやられ、唇がアッチッチ!

通路が狭いので致し方ないところだが、そう思えるのはしばらくしてからで、被害にあった瞬間は赤鬼のような顔になっているのだろう。

たまに幼児から声をかけられたりするのは楽しい。

「おじさん、おそばが好きなの?」

「うん、好きだよ」

「わたしはプリンのほうが好き」

「そう。プリンもおいしいよね」

「おじさん、何歳?」

「え? ……あなたは何歳なの?」

ほんわかしたやりとりが続く。

イラッとさせられるのは、途中で現れる母親に睨まれることだ。

「ミキ、知らない人とお話ししちゃ駄目でしょ」

わが子を叱りつつ、不審者をとがめるようなまなざしがこちらに。

母親どうしが話に夢中になっていたりスマホに集中していたりして、子どもが勝手にコート内を歩きだすのは日常茶飯の光景だ。困るのは、男性客を見る目が最近とてもきつくなったことである。

あちこちで「男はつらいよ」

フードコートに限らず、たとえば公園。新芽が萌えだした木立をながめ、足を止めていると、視線の矢が飛んでくる。木を見上げている分にはまだいいが、遊んでいる子どもを目で追ったりしようものなら集中砲火を浴びかねない。保育士やPTA役員の不祥事が世間をにぎわす時代だから、これも致し方ないところではある。

「人を見たら泥棒と思え」。昨今は「男を見たら変質者と思え」。渥美清さんも「男はつらいよ」と草葉の陰で嘆いているのでは。

私は自分のリフレッシュを兼ねて、2年に1冊くらいの割合で児童書を刊行している。そのためフードコートであれ公園であれ、子どもを見るとつい目で追ってしまうクセがあって、これが災いするようだ。

では、どのように「いまどきの子どもたち」の情報を得ればよいか。よくやるのが学校に手紙を書いて教員とコンタクトをとり、取材をさせてもらうことだ。自己紹介がわりに拙著を添え、校長あてに出す。ほぼ百パーセント応じていただける。

その場合、必ずといっていいほど校長室に通され、校長や教頭と話すことになる。当然といえば当然なのだが、どうしても型どおりのやりとりに終始しがちで、子どもたちの様子を質問しても、「ウチの児童はみな元気です」に類した答えばかり。そこで「放課後、校庭の隅から観察させてください」とお願いする。

許可が出て校庭へ。が、今度は児童のほうに「へんなおじさん」を警戒する。ふだんのように教えられているので、自然なふるまいができなくなるのだ。

いっそのこと女装して——。いや、それはもっとまずいことになりそうだ。